

「江戸の女性美を描いた最初の芸術家・葛飾応為！」 ～いま、なぜ応為の絵がもてはやされるのか～

葛飾応為 人と作品

愛知学院大学モーニングセミナー

徳川美術館 神谷浩

2026年7月14日

1 はじめに： 私と北斎・応為

- ・ 1991 北斎展（名古屋市博物館）
- ・ 2006～2007 北斎展（江戸東京博物館／名古屋市美術館他）
- ・ 2009 愛知県史でメナード美術館「夜桜美人図」調査
- ・ 2010 テレビ番組「おんな北斎」（読売テレビ 大阪）
- ・ 2014 大浮世絵展（国際浮世絵学会50周年記念 名古屋市博物館他）に、「夜桜美人図」出品

2 応為とはどんな人

- 生没年不詳 1800年前後
- 葛飾北斎の三女。名は阿栄（おえい）。「応為」は画号
- 知るために 同時代の記録（ほとんど無い）
『葛飾北斎伝』明治26年刊行の、北斎に関する調査記録集。飯島虚心著
実際の作品から読み取る。
- 変わり者（北斎同様）
- 作画に長ず（北斎譲り）。時に北斎を上回る。

3 作品確認＜魅力と特質＞

- 落款のある作品が少ない。年紀作は無い。
- 初期作・晩年作の別も、画風から検討することが求められる。
- 画域は北斎より狭い
- 美人画では北斎より巧い（北斎談）
- 細かな描写は北斎より優れる。
- 光・影への執着心（格子の陰影、星の表現、灯明の描写）
- 北斎の代筆、影武者
- 西洋画をよく吸収したといわれる（陰影法、遠近法）
- 肩が凝りそうな人物は応為か



応為筆 吉原格子先之図(太田記念美術館)



北斎仮宅之図
(国立国会図書館蔵)



春夜美人図(夜桜美人図)
(メナード美術館)

平常二人三語ること 我は枇杷葉湯に
 反し九月下旬より四月上旬迄
 巨燵を放ること無しと 如何
 なる人と面会なすといへども
 放ることなし 画くにも又可此
 倦く時は傍の枕を取りて
 眠る 覚れば又筆を取
 夜着の袖は無益也として 不付す
 本所亀岡町はんの木馬場
 借宅の躰老人長く
 住居故御嚙二ゑかく
 御物語残
 御目通之節言上
 可此候
 為一
 百拝
 昼夜如斯なる故炭にてハ
 逆上なす故炭団を用ゆ
 然るゆへ風の湧くこととゆる二
 物なし



北斎仮宅之図（国立国会図書館）

- ◆・次ページ以下、飯島虚心『葛飾北斎伝』（明治26年9月12日刊 上下2巻）の全文を入力したテキストから、「応為」「阿栄」の記述のある順に、記述の内容ごとにより書き出しました。
- ◆入力にあたっては以下のようにしました。
 - ・異体字や旧字体はなるべく原文通りとし、第一水準、第二水準にない文字は 二 とした。
 - ・【 】は原文の分かち書き、{ } は原文に付されたふりがなである。
 - ・原文の読点（、）の一部は、読みやすさを考慮して、句点（。）に変えてある。
- ◆原文の記述に、章立てや項目名などは一切見られません。項目名、○数字は神谷によるものであり、（ ）は神谷による補記です。改段は適宜おこないました。
- ◆『葛飾北斎伝』は、鈴木重三氏によるきわめて詳細な校注が加えられて、岩波文庫の1冊として刊行されています。（岩波文庫 『葛飾北斎伝』 飯島虚心著 鈴木重三校注 1999年刊）

1 北斎初めての火災に遭う（上巻64ウ～）

- ・同（天保10 1839 80歳）十年の頃、本所石原片町に住し、後に達摩横町に転じ、火災に罹る。是より先、翁が七十五歳の時（天保5年）、転居せしこと、凡五十六回なれども、一回も火災に遇ひしことなしとて、自鎮火の守札をかきて、人に与へしことあり。按ずるに、昔時火災は、江戸の名物にして、冬春の候は、毎夜二三回の火災あらざることなし。これを江戸の花と称へ、他国の人に誇る。故に江戸の人にして、生涯火災に遇はざるものなし。北斎の如く、歳七十五転居五十六回にして、火災に遇はざるは、実に珍らし。されど終に火災を免るゝこと能はずして、乏しき衣類諸道具を失ひ、娘と共に赤裸となり、恰乞食の如きありさまとなりし。其の火災に遇ひし時、翁は、筆を握りて家を飛び出し、娘**阿栄**も取りかたづけ持ち出づる暇は、ありながら、跡をも見ずして、逃げ去りたり。さて画を請ふ者ありしが、筆はあれど、硯其の他の器具なければ、ありあふ磁壺 {とくり} を打ち砕き、底の方を筆洗となし、碎片を絵の具皿となし、画きて与えたり。此の頃の貧苦は、殊に甚しかりし。されど更に憂ふる色なし。【柴文の話。】

2 北斎の死に際して（上巻67オ～）

- ・同二年（嘉永2年 1849 90歳）、翁病に罹り、医薬効あらず。是よりさき医師竊に娘**阿栄**に謂て曰く、老病なり、医すべからずと。門人および旧友等来りて看護日々怠りなし、翁死に臨み、大息し天我をして十年の命を長ふせしめばといひ、暫くして更に謂て曰く、天我をして五年の命を保たしめば、真正の画工となるを得べしと。言訖りて死す、実に四月十八日なり、歳九十、浅草の誓教寺に葬る。【今浅草長住町四十四五番地】

3 北斎と応為の日常（下巻8オ～）

- ①河鍋暁斎曰く、北斎翁は、酒を飲まざるのみならず、茶も上等の茶は、これを嗜まず。且烟草を吸はず。殊に烟気をきらひ、夏夜蚊遣を用ゐず。故に翁の所に至れば、烟草を吸はざりしと。【辻氏の話に、暁斎初狩野家の画法を学びしが、後に北斎の風を慕ふ】
- ②戸崎氏曰く、翁は酒を飲まずして、菓子を嗜め

り。故に翁を訪ふことにならず、大福餅七ツ八ツを懷にして、おくりしが、翁大に喜び、舌を鳴らして食ひたり。其の頃、大福餅の価は、一ツ四文なりし。

- ③翁は、酒を嗜まず。茶を好まざれども、常に貧し、衣服破れたりと雖厭はず。金錢を得るといへども、敢て貯ふの意なく、これを消費すること、恰土芥のごとし。当時通常の画工の画料は、絵本類一丁、金二朱【今の十二錢五厘】より多からざるが、北斎は、一丁金壹分【即廿五錢】にして、得る所頗る多しといふべし。然れども、常に赤貧にして、衣服寒を凌ぐに足らざること、屢これあり。これ金錢を貯ふに意なく、其の心唯一に絵画に専なるを以てなり。
- ④或は曰く、翁の貧しきは、怪むに足らざるなり、かの画図の報酬金など、紙に包みて、おくり来れば、包みの中には、何程あるやをかへりみずして、机辺に投げ出しおき、米商、薪商人など来りて、売り掛け金を催促すれば、直に其の包みのまゝにて、投げ出だし与へける。商人等家に歸りて、包みをあくれば、意外に金の多きことありて、竊にこれを納め、又少き時は、催促して不足を受取るなり。故に商人等は、竊に翁をもて、善き顧主とせり。【此の一話、絵画叢誌にも出づ、】金銀をあつかふこと、此の如くなれば、其の日に得る所は、多けれども、常に足らざるなり。
- ⑤関根氏、嘗浅草なる翁の居を訪ひし時、翁は破れたる衣を着て、机にむかひ、其の傍に、食物を包みし竹の皮など、取りちらしありて、甚不潔なりしが、娘**阿栄**も、その塵埃の中に座して画き居たりし。其の頃翁歳八十九、頭髮白くして、面貌瘦せたりと雖、氣力青年のごとく、百歳の餘も生きぬべしとおもひしが、俄然九十にして死せり。惜むべしと、同氏の話なり。又翁の面貌は、瘦せて鼻目常人に異ならざれども、たゞ耳は、頗巨大なりと。同氏の話。【巻首にある翁の肖像は、白井、本間、小林諸氏のすゝめによりて、掲げたるのみ、】
- ⑥清水氏曰く、戸崎氏嘗翁を訪ひし時、翁机により筆をもて、室の一隅を指し、娘**阿栄**を呼びて曰く。昨夕まで此に蛛網のかゝりてありしが、如何にして失せたりけん。爾しらずや。**阿栄**首を傾け、すかしみて、大に怪み居たり。戸崎氏出でゝ人に語りて曰く、北斎および**阿栄**の懶懦にして、不潔なることは、此の一事にてもしる

べし。

⑦戸崎氏又曰く、北斎翁、本所石原片町に住せし時は、煮売酒店の隣家にて、三食の供膳は、皆この酒店より運びたり。故に家には、一の飯器なし、唯土瓶、茶碗二三個あるのみ。客来れば、隣の小奴を呼び、土瓶を出だし、茶をといひ、茶を入れさせて、客にすゝめたりと。

⑧関根氏増補類考に曰く、翁は、生涯赤貧にして世を終ふ。壮年の頃は、一脚の机なく、飯櫃を机にかへて、板下を画きしとぞ。又翁が嵩山房小林氏に贈りし手簡中に、「【前略】誠に今日は、囊中一文も無御座候、引越後、大不工面故、何卒少々には御座候得共、△一丁半画料十八匁、△日光名所の扉の画料七匁五分、△而十八匁と南一片（＝南鐐1枚。南鐐は二朱銀の異称。8枚で1両にあたる）、【但し本所は、両替むつかしく候間、不残鳥目にて御かし可被下候、】（幕末で、金1両およそ銀60匁、この時期の1両は今の3～4万円）娑婆にすむ粥なき鍋のつるきれて、すくふばさつもあらしとおもへば。右の体たらく、御一笑可被下候、小林様御店衆中様」とあり。按ずるに、此の狂歌の大意は、貧くして粥もすゝれぬありさまなれば、何卒画料を遣はされて、御すくひ下されたしといふにあり。最憫むべし。

⑨過日露木氏、翁が本所亀沢町榿{はんのき}馬場に住せし頃の室内のありさまを画きて、余におくる。図中巨燵を背にし、布団を肩にかけ、筆を採り画き居るは、即北斎翁にして、其の傍に坐し、翁が画くを窺ひみるは、即娘**阿栄**なり。室内のさまは、いづれもあれはてゝ、翁が傍の杉戸には画帖、扇面之儀は、堅く御断申候、三浦屋八右衛門とかきたる紙を貼りてあり。又**阿栄**の傍の柱には、蜜柑箱を少しく高く釘つけになして、中には、日蓮の像を安置せり。火鉢の傍には、佐倉炭の俵、土産物の桜餅の籠、鮎の竹の皮など、取ちらし、物置と掃溜めと、一様なるが如し。

4 北斎の画業について（下巻17ウ～）

・露木氏曰く、余北斎翁の門に入り、画法を学びしか。一日**阿栄**にむかひ、嘆息して謂て曰く、運筆自在ならず、画工とならんを欲するも、蓋し能はざるなり。**阿栄**笑て曰く、我が父幼年より八十余に至るまで、日々筆を採らざるることな

し。然るに過ぐる日、猶自腕{うで}をくみて、余は実に猫一疋も画くこと能はずとて、落涙し、自其の画の意の如くならざる嘆息せり。すべて画のみにあらず、己れ及ばずとて自棄てんとする時は、即これ其の道の上達する時なりと。翁傍にありて、実に然るなりといへり。

5 北斎の著作紹介（下巻46ウ～）

・○美智廼志遠里 一冊

文久二年若林喜兵衛の出板せし所なり。或は曰く、此の書は、翁の筆にあらず。柳川重信か。或は**阿栄**の画ならんと。又翁が壮年の頃、書きおけるを彫刻せしものかと。

6 北斎の家族（下巻60ウ～）

- ①北斎の妻、其の名詳ならず。一男二女を生む。死去か、離別か、詳ならざれども、後に某氏を妻とす。又一男一女を生む。【一説に一男二女】これ又離別か、死去か、詳ならず。後年妻なし。或はいふ。翁は、五十三歳の頃より、独居して、婦人を近づけざりしと。
- ②長男は、其の名詳ならず。一説に、名は、富之助。中島氏を継ぎ、用達の鏡師たりと。又一説に、【関根氏】長男は、放蕩無頼にして、家にあらず。終りを詳にせず。翁は、常に此の長男の為に、心を痛め、屢負債を償ひしことありと。
- ③次男は、後妻の生む所にして、幼名を多吉郎といふ。本郷竹町の売人、勘助といふ物に養はれ、後に御家人加瀬某の養子となり、名を崎十郎と改め、御小人目付より、御小人頭に転じ、進みて支配勘定となり、又御天守番となる。俳諧を好みて、椿岳庵木峨といふ。一説に、加瀬崎十郎は、御小人頭より御徒目付になりしと。かの画狂老人の墓を建てたる、加瀬二次郎氏は、この崎十郎の孫にして、即翁の曾孫なり。
- ④長女名は詳ならず。一説に**阿美与**。門人柳川重信、鈴木重兵衛に嫁せしか、睦まじからずして、家に帰りて死す。喜多村節信の筆記に、北斎一旦重信を養子とせしが、何の故にや、後に義絶せり。夫れより、重信独立して、頻りに板下を画きしか。北斎これを拒みたり。柳亭種彦其の間に入りて、双方をなだめたりとあり。これに抛れば、重信に長女をあはせて、贅とせしものゝごとし。この女、一男を生む。其の名詳なら

ざれども、即翁の孫にして、前に載せたる翁が
手簡中に、孫放蕩云々は、即この孫なり。

⑤次女、名は詳ならず。一説に、阿鉄。画をよく
し、他へ嫁せしが、夭死す。一説に、幕府の用
達某に嫁せしと。

⑥三女、名は、**阿栄**。南沢等明に嫁す、等明は、
橋本町二丁目水油屋庄兵衛の男なり、幼名を吉
之助といふ、長じて画師等琳の門に入り、画法
を学び、等明と号す。**阿栄**を妻とせしが、睦ま
じからずして、離別せり。関根氏曰く、**阿栄**の
拳動、北斎翁に似たれば、其の離別せらるゝも、
又宜ならずや。且かの等明は、画を嗜みて画き
たれど、**阿栄**よりは拙し。故に**阿栄**は、常に其
の画の拙所を指して、笑ひしと。**阿栄**家に帰り
て再嫁せず。

⑦**応為**と号し、父の業を助く。、最美人画に長じ、
筆意或は父に優れる所あり。かの高井蘭山作の
女重宝記の画のごとき、よく当時の風俗を写し
て、妙なりといふべし。

⑧按ずるに、**応為**の名、何に拠るを知らず。一説
に、**応為**は、訓みて、オーヰ、即呼ぶ声なり。
阿栄父と同居、故にオーヰオーヰ親父{おやぢ}
ドノといへる。大津絵節（当時の忠臣蔵五段云
々）より取りたるならん。、蓋し別に意味ある
にあらずと、或は然らん、

⑨北斎翁嘗人に語りて曰く、余の美人画は、**阿栄**
におよばざるなり。彼は妙に画きて、よく画法
にかなへり。【露木氏の話】

⑩梅彦氏、嘗**阿栄**に依頼し、稻荷社前に供ずる発
句の奉灯の口画を画かせたるが、**阿栄**諾して盆
裁の桜のかげに、猫児の戯るゝ所を画く。下筆
細密にして、設色佳麗なり。同氏**阿栄**に謂て曰
く、奉灯の口絵なれば、此の如く細密なるを要
せずして可なるべし。**阿栄**曰く、此の絹本は裏
打せし者なれども、画きたるなり、従来裏打せ
し絹本は画き難きものなれば、尋常の画工なら
ば、謝絶して画かざるべし。妾は、試みに其の
画き難きものに画きたるなり。知らずしらず、
細密になりたれど、他人のいふごとく、画き難
きものにあらざと。同氏携え帰りて、熟視すれ
ば、気韻生動、筆力非凡なり。よりにて奉灯とな
すは、おしければ、更に他人をして、口絵を画
かしめ、神前に供し、しかして此の**阿栄**の画は、
裱装して珍藏せしが、後火災に罹り、これを失
ふ。惜しむべしと。

⑪同氏の話、**阿栄**父の性質に似て、小節に区々た

らず。恰男児の如し。頗任侠の風を好み、清貧
を楽みて、悪衣悪食を恥とせず。三食の下物は、
毎日、煮売店{にうりみせ}より買ひ来りて、
これを食べ。故に竹の皮、座辺にうづだかし、
されど敢て意とせざるが如し。絵画の余、観相
ト占をよくし、晩年仏門に入り、誦念おこたり
なし。

⑫奇行多きが中にも、常に茯苓(ぶくりょう)を
服して、女仙とならんことを願ひ、又常芥子{け
し}人形【一文人形又豆人形ともいふ】を製造
して、これを売り、巨利を得たる事あり。これ
芥子人形の始なりといふ。奇女といふべし。

⑬北斎翁の死するや、**阿栄**悲嘆座に安せず。これ
より居所を定めずして門人或は親戚の家に流寓
し、後親戚加瀬氏の家に居りしが、一日出でゝ
行く所を知らず。一説に、**阿栄**、加瀬氏の家を出
でゝ、加州金沢に赴きて死す。年六十七、又一
説に、徳川旗下の土某の領地、武州金沢の近
傍に到りて死せり。又一説には、信州高井郡、
小布施村、高井三九郎の家に到りて、死せりと。
詳ならず。白井多知女の遺書には、安政四年の
夏、東海道戸塚宿の人、文蔵といへる者**阿栄**を
招き画を請ふ。**阿栄**筆を懐にし、出て行きしが、
夫より知れずなりしと。

⑭露木氏曰く、**阿栄**の拳動、北斎翁に似たれども、
唯翁と異なれるは、少しく酒を飲み、又煙草を
喫することは是れなり。**阿栄**一日あやまちて、翁
が画きし絹本の画に、煙草の吸殻をおとし、自
悔ひて、以来煙草を禁ずべしといひけるが、暫
くして又旧のごとし。

⑮又曰く、**阿栄**は、其の面貌甚だみにくゝ、腮(あ
ご)出でゝ、頗異相なりし、翁は、常に呼びて、
アゴアゴといへり。

⑯梅彦氏曰く、余が初めて北斎翁の所に到り、一
面せしは、実に二十歳の時にして、其の頃、**阿
栄**は、四十歳前後なりし。【梅彦氏は、今七十
有余歳なり、】

⑰又曰く、**阿栄**門人あり、大抵商家の娘、および
旗下の士の娘などなりし、晩年には、自往きて
教授せり。

⑱又曰く、北斎翁は、もとより乱情にして、室内
の掃除をきらふといへども、**阿栄**は、翁ほどの
乱情にあらず。されば頭髮などは、常に乱だせ
しことなし、其の室内を掃除せざりしは、枉げ
て翁の意に従ひ居たるものゝごとし。しかして
其の品行は、甚正し、情夫などありたること聞

かざるなり。常に翁の傍にありて、孝養怠りなし。感賞すべきことなり。

⑮白井孝義氏曰く、**阿栄**は、余が母方の祖父加瀬崎十郎の家に居りしが、其の氣象恰男子のごとくなれば、祖母と善からず。常に曰く、妾は、筆一枝あらば、衣食を得ること難からず。何ぞ区々たる家計を事とせんやと。

⑯又曰く、北斎翁の後は、唯加瀬氏に存せるのみ

にて、他にあることなし、其の加瀬氏も絶へて、余が第二次郎、後を継ぎしか、早世して、今余が子また其の後を継ぐ。

⑰按ずるに、同氏の言に拠れば、かの世に北斎の後孫など称するものは、皆其のいつはりなるを知るべし、一説に、【白井多知女の遺書】四女名は、阿猶 {なお}【按ずるに早世か詳ならず】

余録

奇人北斎①北斎とカピタン (飯島虚心著 『葛飾北斎伝』より)

此の頃【年月詳ならず、北斎本所林町三丁目家主甚兵衛店に住せし頃なり、】江戸に來りし和蘭の加比丹我町人の小兒出産の体を始として、年々成長の体、筆算稽古の体、又年たけて遊里などへ通ふ体、又年老ひて死去し、葬礼を行ふの体を図し、男子女子と一卷づゝ、二巻に画かんことを北斎に依頼し、金百五十円の謝礼にて、約定せり。加比丹附属の医師某も、亦全図二巻を画かんを乞ふ、北斎諾して、数日間にこれを画き、され四巻の図を携へて、旅館に到りしに、加比丹は、約のごとく百五十金を出だし、二巻を受納せり。夫より医師の許に到りしに、医師の曰く、予は加比丹と異なり薄給の身なれば、同等の謝礼はなし難し、半減即七十五金にて、二巻を与へ給ふべし。北斎少しく憤りて曰く、何故に最初に、其の事を明し給はざるや、画は同じくても、彩色其の他を略すれば、七十五金にても画かるるなり既に画きたる上は、今更なすべきなし。又これを七十五金にて進するとき、加比丹に対し余り高価を貪りたることに当り、心苦しき限りなり。医師の曰く、されば、二巻の中、男子の図一卷を七十五金にて与へ給へと。此の時尋常の画工ならば、諾して一卷

を与ふべきに、赤貧洗うがごとき北斎、其の約に背きたるを憤り、二巻共に懷にして、直に家に持ちかへれり。家婦其の故を聞き、諫めて曰く、日夜丹青を凝らし画き給へる画卷なれど、此の国我邦にては珍しからぬものなれば、売らんとするも、買ふ者なかるべし。時間と費用を算すれば、損失なれども、七十五にて、医師に与へ給ふか、得策なるべし。今七十五金を得ざれば、貧苦の上に、貧苦をかさめぬの道理ならずや、北斎黙して辞なく、暫ありて曰く、予も亦其の貧苦の日に迫るを知らざるにあらざるなり。されど外国人の約に背きしを、其の通りになしおく時は、自分の損失は、免るゝとも、我邦人は、人によりて掛道をいとふの嘲は、蓋し免るゝは能はざるなり。故に予は深く其の所を考へて、持ち帰りしなりと、後に譯官某此の事を聞き、加比丹に語りければ、加比丹も深く感じて、直に百五十金を出だし、かの二巻をも請ひ得て、本国に持ち帰りしとぞ。【右の一條は、古画備考にも出づ】其の後和蘭より画を請ふ者多く、毎年数百葉を画きて、長崎に送り、海外に輸出せしが、後に幕府国内の秘事を漏すをおそれ、これを禁止せり。

奇人北斎②北斎のパフォーマンス

北斎は、人の目を驚かすことを好み、曲芸めいたパフォーマンスもしています。將軍の前で谷文晁とともに席画を命じられたとき、北斎は、長く継いだ紙に刷毛で藍を引き、かかとに朱肉をつけた鶏を放って、その足跡を川面に流れる紅葉に見立て、これぞ龍田川の風景と堂々と言いつつ立っています。また、疊百枚以上の大画の即興描きは各所でおこなっています。文化元(1804)年には江戸で百二十疊敷(百七十五疊ともいわれる)

に半身の達磨を描いたのが最初で、文化十四(1817)年、名古屋での大達磨の即興描きは最も成功した例といえるでしょう。この時、北斎は百二十疊敷の半身達磨像を、即興でしかも半日で描きました。所は大須西掛所。今の大須のスケートリンクのあるあたりです。

一方、小さな絵も描くことができました。両国回向院で布袋の大画を制作したすぐ後に、米一粒に雀二羽を描いたという話も伝わっています。